

## 何を感じ、何を思いましたか

10月17日にPTA主催の人権講演会を行いました。今年度の講演会の講師は、「片腕の看護師」の伊藤真奈美さんで、演題は『あきらめない心』でした。自らの体験に基づいたお話でした。夢のなかった中学生時代、あるきっかけで看護師を目指そうと考えた高校時代、そして、看護師という夢に向かってきた看護学校時代、想像もしなかった交通事故による右腕切断。壮絶なお話でした。そこから、全てを諦めかけた自分に看護学校の先生がかけてくれた言葉に勇気もらって、再び看護師を目指し、日本初の「片腕の看護師」となれました。また、水泳でパラリンピックにも2度出場されたということ。そんな伊藤さんが生徒の皆さんに何を伝えたかったのか。

人は、それぞれ色々な環境の中で生活しています。その環境がある日、突然変わることもあるかもしれない。でも、自分の夢や目標は捨てることなく、頑張りたい。大切なことは『あきらめない心』ですよ。というようなことを伝えたかったのではないかな、と感じました。生徒の皆さんも何かを感じ、考えてほしいと思います。

### (保護者の皆さまへ)

17日のオープンスクールおよび講演会に来校頂き、ありがとうございました。30日～11月1日のオープンスクールにも、ぜひ、お越し下さい。

## [部活記録 (市内新人大会の足跡) No.2]

雨天で延期になっていた野球とソフトテニスの結果を報告します。

### (野球部)

2位

#### [顧問コメント]

多くのご声援を頂きましたが、優勝することが出来ませんでした。次、そして、夏に向けて、チームとして足りないものを明確にし、練習していきます。チーム一同頑張ります！

### (男子ソフトテニス部)

団体 優勝

個人 優勝 (塩谷・大道)、2位 (川西・松浦)

#### [顧問コメント]

市内も東播もあくまでも通過点。

自分たちの力を出し切れるように「ストイック」に頑張ります！

### (文化部門表彰)

文化的な分野で、本校の2名の生徒が大きな賞を受賞しましたので、紹介しておきます。

○1人目は、1年2組の榎下 幸実 さんです。

「平成31年度 兵庫県中学校総合体育大会」の大会スーガンに選ばれました。受賞した、榎下さんが考えた、スーガンです。

『新しい時代の幕開けに 輝け！翔け！ 兵庫の空へ！！』

○2人目は、3年3組の要 香凜 さんです。

本年度人権作文コンクールにおいて、下記の賞を受賞しました。

◎東播磨管内：最優秀賞 ◎兵庫県：兵庫県教育委員会賞

なお、受賞した作品を紹介します。

### 「私が助ける」 要 香凜

「こっちは下りですよ。」これは先日、父と出かけ、帰ろうと駅のホームへ向かっていた時に、父がエスカレーターの前にいたある男性にかけた言葉だ。その男性は、白杖を持ち、歩きながら前方に振っていた。視覚障害者のようだった。

私たちが降りたのは、大きな地下街があることから、毎日、多くの人で賑う駅である。駅の出口付近にも多くの人が出て、人と人の間を通り抜けるのも大変だった。そんな中、私たちは、白杖を持ったその男性に気づいた。「こんな人ごみの中、あの人大変そうやな。」父は私に言った。しかし私は前を歩いていく父の背中を追うのに必死で、大変なのはみんな同じだと思い返事をしなかった。前方の振っている白杖が、歩こうとしている場所にいる人に当たる度に当てられた人のほとんどが嫌な顔をする。なかには、悪態をつく人までいた。その白杖の男性は、言葉も上手く話せないようで、当ててしまう度に申し訳なさそうな表情を浮かべていた。確かに私たちより大変そうだった。

買い物を終え、駅のホームへ向かっていた私たちは、あの白杖の男性の後ろ姿に気づいた。私たちと同じ駅のホームに向かっているようだった。ホームに行くには、上りエスカレーターを使わなければならない。この駅には、その上りエスカレーターと、ホームから私たちがいる所へつながる下りエスカレーターが並んで設置されている。何だか嫌な予感がして、私は父に言った。「大丈夫かな。」「あんたが手助けしたら、大丈夫や。」私を試すような父の言葉にドキッとした。行動しなければ、と思っているのに、周りの人の目が気になって、足が動かない。誰かが助けてくれるだろうという周りの人への甘えが、私の行動を邪魔してくる。そして、私の嫌な予感のは的中する。男性は、下りエスカレーターの方へ進んでしまったのだ。私は思わず、「あっ」と、声を出した。しかし、私の足はまだ動こうとしない。すると、父は、持っていた荷物を全て置いて、男性のもとへ走っていった。「こっちは下りで

ですよ。」父は、男性の両肩を持ち、男性の目の前に立って、声をかけていた。それから父は、男性と一緒に上りエスカレーターに乗り、上まで一緒に上がった。そんな父の一連の行動を、私はその場に立ち尽くして見ていた。そして、父は戻ってきて、何事もなかったかのように荷物を持ち、私に声を掛ける。「よし、帰ろう。」父は周りの人に見られていた。しかし、彼らの中には、嫌な顔をしている人も、悪態をついている人もおらず、みんな笑顔だった。私は歩き始めた父の背中を追いながら、たまたま聞いた。「お父さん、恥ずかしくないん?」「あんたは、お父さんが恥ずかしいことしたと思うか。私は、ここで、やっと気づいたのだ。たくさんの人の前で人助けをすることは、決して恥ずかしいことではないということに。荷物を全て置いて、男性のもとへ走っていった父の姿は正義のヒーローだと思った。帰りの電車で父の言葉を思い出す。「あんたが手助けしたら、大丈夫や」。もし、私が、父より先に白杖の男性を助けることが出来ていたら。きっと私は、恥ずかしさで頭が真っ白になっていただろう。しかし、父のように、ホームまで男性を連れて行くことが出来ただろうか。おそらく出来ていないだろう。それでは、「中途半端な優しさ」になってしまうのではないか。私は、そんな優しさに意味はないと思っていた。「私やったら、ホームまであの人が、連れていかれへんかったと思う。あんな一瞬でホームまで連れて行こうって考えられへんもん」。思い返すと、やはりあの時は、私が声をかけるべきではなかったような気がする。しかし、父は言った。「お父さんも、その場ですぐ思いついたわけちゃう。まずは、下りに行くのを止めよう、その次は、上りに連れて行こう。そうやって常にその人のことを考えたら、自然と行動出来るはずやで」。私は、父から、自分が助けたということに満足してしまうのではなく、「今」相手に何をしてあげられるかを考えることが、大事だということを学んだ。全ての障害者に手助けすることは出来なくても、気づいた時にさりげなく手を差し伸べられる。そんなヒーローに私はなりたいと思う。